
 症 例 報 告

男性乳腺 Pagetoid 癌の 1 例

長倉 成憲・及川 明奈・高久 秀哉・鈴木 俊繁

水戸済生会総合病院外科

A Case of Male Pagetoid Carcinoma of the Breast

Shigenori NAGAKURA, Haruna OIKAWA, Hideya TAKAKU and Toshishige SUZUKI

Department of Surgery, Mito Saiseikai General Hospital

要 旨

男性の乳腺 Pagetoid 癌の報告は、その可能性のある症例を含めても散見される程度である。今回我々は、男性乳腺 Pagetoid 癌の 1 例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。症例は 78 歳男性で、既往に脳梗塞後遺症による運動性失語があり意思の疎通が困難であった。当院受診半年前より左乳頭部にびらんが出現した。次第に痂皮を伴い隆起してきたため、近医皮膚科を受診した。軟膏治療にて改善しないため、当院へ紹介された。左乳房 EAB 領域に 3.5cm 大の腫瘤を触知するが、圧痛や乳頭異常分泌は認めなかった。超音波検査では、乳腺腫瘍は悪性腫瘍が疑われ、同側の腋窩リンパ節腫大を認めた。針生検を施行し、乳頭腺管癌および腋窩リンパ節転移と診断した。画像検査では遠隔転移を認めず、腋窩リンパ節郭清を伴う胸筋温存乳房切除術が施行された。術後の病理組織診断は、乳頭腺管癌で、T2N1M0 Stage IIA, ER (+), PgR (+), HER2/neu タンパク過剰発現 (-) であった。また乳頭部皮膚直下までの癌浸潤を認め、Pagetoid 癌と診断した。男性乳腺は女性と異なり乳管だけであり、浸潤性乳管癌の発生から乳管内進展を経て、乳頭部の皮膚所見を呈する Pagetoid 癌に至る前に、腫瘤触知によって発見される乳癌が多いと考えられる。自験例は、脳梗塞の後遺症により意思疎通を図ることが困難であったため、腫瘤触知の段階で発見されずに Pagetoid 癌に至ったと思われる。

キーワード：男性乳癌, Pagetoid 癌, 浸潤性乳管癌

はじめに

男性乳癌は全乳癌の 1% 以下であり^{1) - 4)}、比

較的稀とされている。また、乳腺 Pagetoid 癌は、乳管内病巣の管外浸潤が著しくて乳頭や乳輪の表皮内へ癌が進展するものとされている^{5) - 7)}。

Reprint requests to: Shigenori NAGAKURA
Department of Surgery
Mito Saiseikai General Hospital
3-3-10 Futabadai,
Mito 311-4198 Japan

別刷請求先：〒311-4198 水戸市双葉台 3-3-10
水戸済生会総合病院外科 長倉 成憲

今回我々は、乳頭の発赤・びらんを主訴に発見された男性乳腺 Pagetoid 癌の1例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

症 例

症 例：78歳，男性。

主 訴：左乳頭の発赤・びらん。

既往歴：1993年に脳梗塞をきたし、後遺症として運動性失語を認め、意思の疎通が困難であった。

現病歴：2008年9月頃より左乳頭の発赤・びらんに家人が気づき、近医皮膚科を受診した。ステロイド軟膏による治療が施行されたが軽快せず、2009年4月上旬精査目的に当院を紹介受診した。

入院時現症（図1）：左乳頭に発赤・びらん・痂皮・浸潤局面を認めた。左乳頭下に3.5cm大の硬い腫瘍を触知した。左腋窩リンパ節の腫大を認めた。

血液検査所見：腫瘍マーカー（CEA, CA15-3, NCC-ST-439）を含め、血液・生化学検査に異常を認めなかった。

マンモグラフィー（図2）：右側は、良性石灰化と女性化乳房疑いでカテゴリー2と診断した。左側は、乳頭下に2cm大の境界一部不明瞭な高濃度腫瘍が疑われ、カテゴリー4と診断した。

乳房超音波（図3）：左乳房E領域に、円形で大きさは $1.6 \times 1.3\text{cm}$ （縦横比は0.81）、境界明瞭粗粒、内部エコーは不均質、低エコーレベルで後方エコーは不変を呈する腫瘍を認め、カテゴリー4と診断した。左腋窩に3cm大に腫大したリンパ節を認めた。

針生検病理診断：左乳腺腫瘍および左腋窩リンパ節の両者に針生検を施行した。病理診断は、乳腺腺管癌ならびに腋窩リンパ節転移であった。

CT所見：遠隔転移を認めなかった。

手 術：2009年5月中旬、腋窩リンパ節郭清を伴う胸筋温存乳房切除術が施行された。



図1 肉眼所見

左乳頭に発赤・びらん・痂皮・浸潤局面を認める、乳頭下に3.5cm大の腫瘍を触知する。

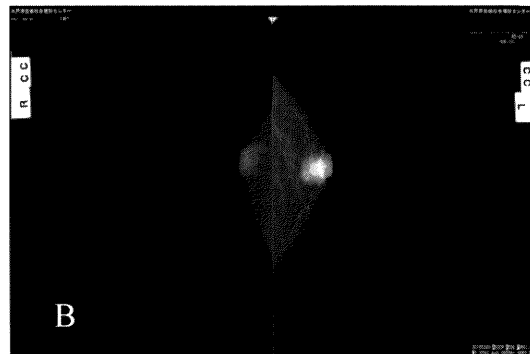
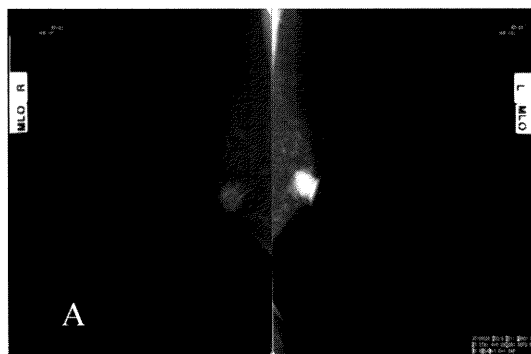


図2 マンモグラフィー

A. MLO (mediolateral oblique) view

B. CC (craniocaudal) view

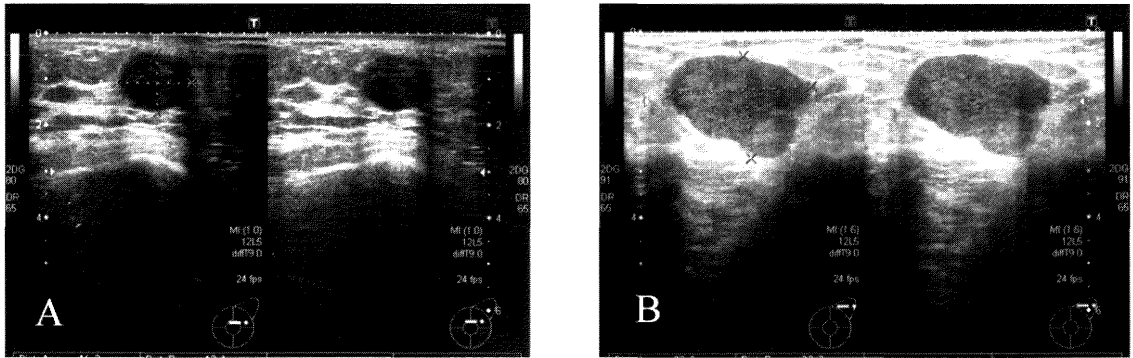


図 3 乳房超音波検査

- A. 左乳房 E 領域の腫瘍
B. 左腋窩リンパ節

病理組織診断（図 4）：浸潤性乳管癌が乳頭部皮膚直下まで浸潤しており Pagetoid 癌と診断した。癌の大きさは $2.4 \times 2.1 \times 1.3\text{cm}$ ，組織型は乳頭腺管癌，組織学的波及度は s（皮膚に及ぶ），核グレード分類は Grage 2, ly（±），v（-），リンパ節転移陽性（6/10），Estrogen receptor（ER）陽性占拠率 10% 以上，Progesterone receptor（PgR）陽性占拠率 5～10% 未満，HER2/neu タンパク過剰発現（-），pT2N1M0 pStage IIA であった。

術後補助療法：Tamoxifen の内服を開始した。

転 帰：2009 年 11 月中旬の胸腹部 CT では再発を認めなかった。2010 年 7 月中旬，昼食摂取時に誤飲し，窒息した。救急隊により当院へ搬送され，心肺蘇生を施行したが回復せず永眠した。死亡時まで，明らかな乳癌の再発兆候は認めなかった。

考 察

Paget 病は，乳頭・乳輪部の表皮内浸潤を特徴とする癌で，乳管内進展がみられ間質浸潤が存在しても軽微なものと定義されている⁸⁾。一方，浸潤性乳管癌の乳管内成分が乳頭に達して臨床上 Paget 病に類似するものは，Pagetoid 癌と定義される^{5)～7)}。坂元ら⁶⁾は，乳頭および乳輪直下に

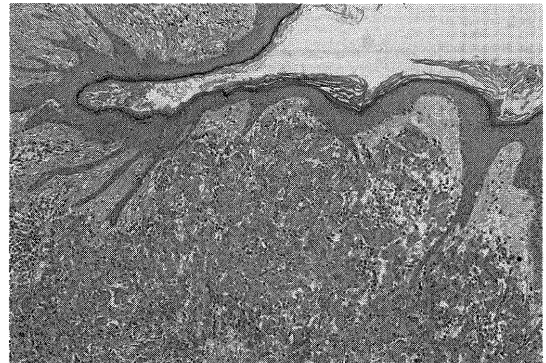


図 4 病理組織所見（HE 染色，×100）

浸潤性乳管癌が乳頭部皮膚直下まで浸潤している。

腫瘍があり，乳頭あるいは乳輪表皮に真皮から癌が直接浸潤している様な所見を呈する 3 例の Pagetoid 癌を報告している。自験例は，乳頭直下に発生した浸潤性乳管癌が乳頭皮下まで浸潤したために，乳頭に発赤・浸潤・びらんなどの皮膚変化を生じた Pagetoid 癌であると診断した。

男性乳癌は全乳癌の 0.3～1% であると報告されている^{1)～4)}。好発年齢は 60 歳前後で，女性に比べて約 10 歳程度高いとされている¹⁾³⁾⁹⁾。ホルモンレセプターの検索では，ER 陽性の頻度が高いとする報告が多く¹⁾³⁾⁹⁾，男性乳癌の内分泌治

療については、Tamoxifenの有用性が報告されている¹⁰⁾。さらにPagetoid癌は、Paget病および通常型乳癌よりも病期の進んだ癌であり、リンパ節転移陽性例が多いと報告されている⁶⁾。自験例もER陽性かつリンパ節転移陽性であったため、術後補助療法としてTamoxifenの内服を行った。自験例は他病死したため、内分泌療法の反応や予後について論じることができないが、内分泌療法が奏功した可能性もある。

男性の乳腺Pagetoid癌の報告は、その可能性のある症例を含めても散見される程度である⁵⁾¹¹⁾。男性乳癌は、腫瘍触知によって発見される事が多いと報告されている¹⁾³⁾⁷⁾。男性乳癌の場合、乳腺は女性と異なり乳管だけであるため、浸潤性乳管癌が発生してから乳管内進展を経て乳頭部のびらんなどの皮膚所見が出現する前に、腫瘍触知によって乳癌が診断される事が多いと梶山ら¹¹⁾は推測している。自験例は、運動性失語により意思の疎通を図ることが困難であったため、腫瘍触知の段階で発見されずにPagetoid癌にまで至ったと考えられる。

結 語

男性の乳腺Pagetoid癌の報告が少ないのは、Pagetoid癌に至る前に腫瘍触知により発見される乳癌が多いためと考えられる。

文 献

- 1) 小林 隆, 佐野宗明, 佐藤信昭, 日野真人, 梨本篤, 土屋嘉昭, 薮崎 裕, 瀧井康公, 田中乙雄: 男性乳癌22症例の検討。日臨外会誌 64: 1566-1570, 2003.
- 2) Hittmair AP, Lininger RA and Tavassoli FA: Ductal carcinoma in situ (DCIS) in the male breast: a morphologic study of 84 cases of pure DCIS and 30 cases of DCIS associated with invasive carcinoma: a preliminary report. Cancer 83: 2139-2149, 1998.
- 3) 松田 実, 岩瀬拓士, 吉本賢隆, 霞 富士雄, 秋山 太, 坂元吾偉: 男性乳癌—臨床像と経時的変遷—。日臨外会誌 58: 513-518, 1997.
- 4) Borgen PI, Wong GY, Vlamis V, Potter C, Hoffmann B, Kinne DW, Osborne MP and McKinnon WM: Current management of male breast cancer. A review of 104 cases. Ann Surg 215: 451-459, 1992.
- 5) 比嘉淳子, 照屋 剛, 佐久田 斉, 伊佐 勉, 城間 寛, 新垣京子, 我喜屋 亮: 乳頭乳輪部落屑を主訴とした男子乳癌の1例。日臨外会誌 69: 20-23, 2008.
- 6) 坂元吾偉, 菅野晴夫, 梶谷 鏝, 久野敬二郎, 深見敦夫: 乳房のPaget病。癌の臨 19: 323-334, 1973.
- 7) 山田雅史, 黒田宏昭, 宮崎純一: 男性乳房Paget病の1例。日臨外会誌 61: 1712-1714, 2000.
- 8) 日本乳癌学会編: 乳癌取り扱い規約。第16版, 金原出版, 東京, pp25, 2008.
- 9) 櫻井照久, 尾浦正二, 森 一郎, 楊 其峰, 木下貴裕, 榎本克己, 平井一成, 吉増達也, 粉川庸三, 覚道健一, 岡村吉隆: 男子乳癌7例の検討。乳癌の臨床 17: 565-567, 2002.
- 10) 飯野佑一, 遠藤敬一, 石田常博: 男子進行乳癌の内分泌療法とエストロゲン・レセプターについて。ホルモンと臨 29: 925-930, 1981.
- 11) 梶山明日美, 村松沙織, 春日好雄, 上原 剛: 男性乳腺Pagetoid癌の1例。日臨外会誌 70: 2965-2968, 2009.

(平成24年2月14日受付)